

〔萬葉集^二相聞〕柿本朝臣麻呂從石見國別妻上來時歌二首并短歌略〇中
 丈夫跡^{マストラト}念有^{オモヘル}吾毛^{ワレモ}敷妙乃^{シキタノ}衣袖者^{コロモノソデ}通而^{トホリテ}沾奴^{ヌレヌ}

〔萬葉集略解^二〕敷たへの枕詞是は夜のものといふ詞也、ますらをと思ひほこりて在し吾も、下にかさねし衣の袖まで涙にぬれとほりしと也、

〔萬葉集^{古十一}相聞往來歌〕寄物陳思

敷^{シキタ}栲之^{クノ}衣手^{イテ}離^{ナレ}而^{ナリ}玉藻^{タマモ}成^{ナリ}靡^{ナシ}可^カ宿^{ヤス}濫^{ラン}和^ワ乎^ヲ待^{マテ}難^{ガテ}爾^ニ

〔後撰和歌集^{十五}〕まさたゝがとのぬ物をとりにたがへて、大輔が許にもてきたりければ、

大輔

ふる里のならの都のはじめよりなれにけりとも見ゆる衣か

〔實方集〕つねふさの少將のもとに、とのぬものある取にやるとて、

かへさんとおもふもくるしから衣わがためかぶるおりしなれば

〔空穂物語^{嵯峨院}〕みぞひつには御ほうぶく一、かぎりなくきよらにて、よるのさうぞく、あやのさ

しぬきにおりもの、あを、あやのうちともなどして、そのあをにかきてむすびつけたる、

露^{ツル}けくて山邊にひとりふす人のよるの衣にぬぎかへよとぞ、ことものさうぞく、女ごのもい

ときよらにしていれてまいり給ふ、

〔源氏物語^{玉蔓十二}〕御返事はおぼしもかけねば、かへしやりてんとあめるに、これよりをしかへし

たまはざらんは、ひがくしからんとそ、のかし聞え給ふ、なさけすてぬ御心にてかき給ふ、い

と心やすげなり、

かへさんといふにつけてもかたしきのよるの衣を思ひこそやれ、ことはりやとぞあめる、

〔古今和歌集^{戀十二}〕題まらす

小野小町

夜衣